

メールレター(9)

モントリオールは橋の町

雪が散らつく日が増えてきました。朝起きると薄っすらと景色が白くなっていることもあります。昼間は、その雪も今のところは消えてしまいます。やがて、この雪が残るようになり、街はすっぽりと雪に覆われ、ホワイトクリスマスを迎えます。

地理的には、ここはどんな町なのでしょう。モントリオールは、湖から二手に分かれたサンローランの河に囲まれた中洲の島にあり、カナダでは第二の大きな町です。フランス語系の町としては、世界ではパリに次ぐ町なようです

サンローラン大河は、オタワ河と合流して時には湖となり、また大河となって、大西洋の北まで流れていきます。大河となっても、向こう岸まで渡るにはフェリーで1時間というところもあるほど川幅は広く、雄大な流れです。モントリオールの暮らしは、島の中をぐるぐる回っているのでなければ、東西南北どこに行くのにも橋を渡ります。ちょっと向こう岸までお買い物やお仕事というところでしょうか。林檎狩りや、アメリカやトロントまでの旅も、まず橋を渡ってからになります。我が家からは、頑固そうで優雅なジャックカルチェ橋や、もっとも使用度の高い、大きなシャンプラン橋、古顔のヴィクトリア橋など三つの橋が見えます。ジャックカルチェ橋はライトアップされ華やかになりました。

今はどの橋もだいぶ老朽化し、オープンの時間が制限されたり、シャンプラン橋は、新しい橋を脇に作っています。作り直すのも広い川幅ですから、かなり遠い所から助走距離の工事が始まります。川の中ほどに工事のステーションが築かれ、工事の材料が運ばれているようです。朝晩は船でここまで作業員も運ばれてきます。

この島で暮らすドラングジュビル一族ですが、義理の長男の嫁の実家は、島の北側にあり、丁度、湖から河になる分岐点にあります。家の前に栈橋を作り、夏場はボートに乗るようになっています。冬は凍ってしまうため、船はしっかりとくるんで他の場所で保管してもらいます。凍りついた庭先の湖は、個人のアイススケート場となり、家族や近所の人たちとアイススケートやアイスホッケーを楽しんでいるようです。ここに生まれてこそ味わえる冬場のダイナミズムかもしれませぬ。私は、遠くにそれ見ながら、ひたすらこたつが欲しいと足元をまさぐります。

我が家は島の南側となり、もう一方の河に沿っています。急流のため、港以外は凍ることはなく、河の向こうにはもう一つ運河が流れています。急流でも浅瀬が多いため、大型の船は通れず、湖の途中から大型の船用に運河が掘られ、掘り起こされた土を使い、島が二つ、川と運河の間に作られました。

北側の川向こうにある、もう一つの大きな島のさらに先にある小さな島に住む義理の次男の所に行くには、橋を二つ渡ることになります。今年の春先のように洪水が起きると、長男の嫁の実家は浸水に怯え、次男は橋を渡れず孤立を恐れることになります。夏場の美しい風景も隠されたリスクがあるようです。

さて、長男の実家ですが、嫁と義母以外は、義父、兄弟も弁護士なのです。ただし、私が合う時はTEEシャツに短パンなので、職業は推測しにくくはあります。長男の義父は、湖に住む電気鰻の研究をするかと思えば、半端でない数の金魚を飼う風変わりな趣味もありますが、ポルシェが大好きで、ガレージには巨大な金魚の水槽の脇にポルシェがありました。

「おーポルシェ、」

「娘以外は、誰も乗せないんだ。」

「ということは、妻も息子もダメ。増して、嫁たちなんてのせないいんでしょうね。」

あの仕切り屋の奥さんがよく耐えたものだ、と、感心しました。年月がたち、ある日、この義母が嬉しそうに言うのです。

「和子、今年の亭主からの私への誕生祝、何だと思う？」

知るわけがありません。

「最新のポルシェ、ポルシェ。」

「それは素晴らしい。。。良かったね。ポルシェに乗れるんだ。それで、亭主は乗せてあげるの。」

「乗せるわけないでしょう。」

「和子、大丈夫、この間、それぞれのポルシェで旅に出たから。」義父が口を挟みます。

「和子、私のポルシェに乗ってみる？」

ポルシェとはいえ、あの耐えることない、大声のおしゃべりはちょっと苦手かもしれません。

「この間、友達とポルシェ大会したんだ、皆で並んで走って集合するんだよ。」義父は幼子のように楽しげに話していました。

「素晴らしい。見事だったでしょうね。」

「ほらほら、写真見てみる？」

貧しい家に育ち、苦学して弁護士になった彼にはこの大きな家も、船もポルシェもアメリカン・ドリームだったのでしょう。

遠くにそれを聞きながら、我が家のドリトル先生は、

「短パンにポルシェか、ライフスタイルはないのかねえ。ヨーロッパなら、ロールスロイスにのるなら、昔は蝶ネクタイをしたものだったけど。親戚の寄り集まりには、ハンバーガーより、シャンペンとかはないのかねえ。」

出されたポテトチップスをつまみながら、アメリカンライフスタイルを嘆くのです。

ごもっともです、ドリトル先生。ここは北アメリカ。シックに目立つか、ぎんぎんに目立つか、人それぞれ、お国柄にもよるようです。